

第4回 水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会 次第

日時：平成26年2月27日（木）13:00～15:00

場所：マーチエキュート神田万世橋 N-5 区画

【議 事】

1. ゲストスピーチ

- ・三井剛氏（(株)JR 東日本ステーションリテイリング代表取締役社長）

2. 意見交換

- ・水辺への思いについて

3. その他

【資料目次】

- ・議事次第
- ・コメンテーターリスト
- ・席次表
- ・資料1 「事例紹介資料」
- ・資料2-1 「メッセージ集（作成の考え方）」
- ・資料2-2 「メッセージ集（イメージ案）」

「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会」
 コメンテーターリスト

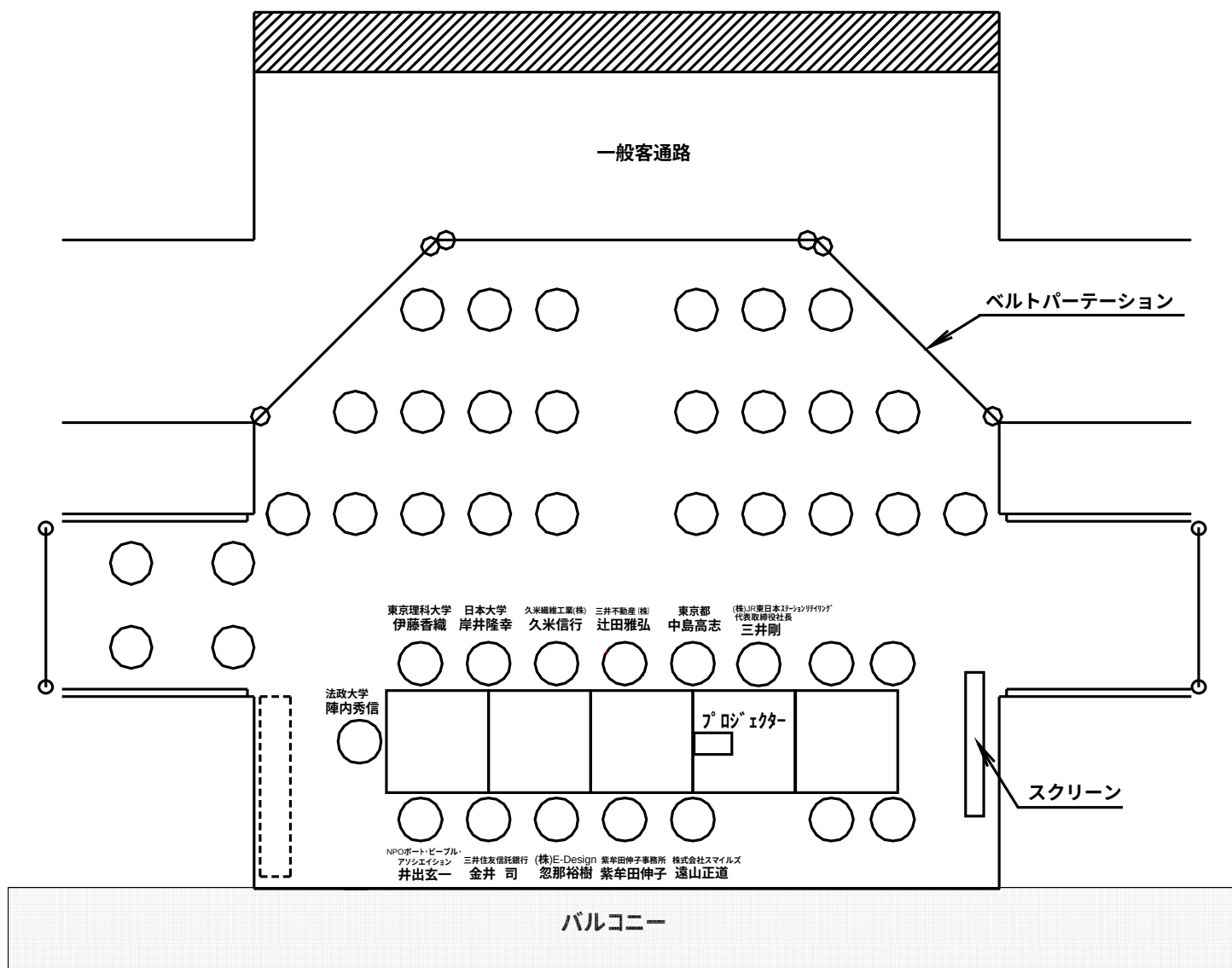
(敬称略・50 音順)

	氏名	所属	第4回出欠
座長	じんない ひでのぶ 陣内 秀信	法政大学デザイン工学部建築学科教授	○
コメンテーター	い で げんいち 井出 玄一	一般社団法人ボート・ピープル・アソ シエーション代表理事	○
〃	いとう かおり 伊藤 香織	東京理科大学理工学部建築学科准教授	○
〃	かない つかさ 金井 司	三井住友信託銀行株式会社理事・CSR 担当部長	○
〃	きしい たかゆき 岸井 隆幸	日本大学理工学部土木工学科教授	○
〃	くつな ひろき 忽那 裕樹	株式会社 E-design 代表取締役	○
〃	く め のぶゆき 久米 信行	久米繊維工業株式会社取締役会長	○
〃	し む た のぶこ 紫牟田伸子	紫牟田伸子事務所代表	○
〃	た な か よしひろ 田中 義宏	大阪府都市整備部技監	×
〃	つじた まさひろ 辻田 昌弘	三井不動産株式会社 S & E 総合研究所 長	○
〃	と お や ま まさみち 遠山 正道	株式会社スマイルズ代表取締役社長	○
〃	なかじま たかし 中島 高志	東京都建設局河川部長	○

第4回 水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会 席次

日時:平成26年2月27日 (木) 13:00~15:00

場所:マーチエキュート神田万世橋 N-5区画





マーチエキュート神田万世橋 開発について

株式会社JR東日本ステーションリテイリング
代表取締役社長 三井 剛

ecute

■開発着手時

ecute



ecute



Ecute

周辺エリア図



- ☐残された数少ない喧噪の中のポケットスポット
☐古さ×新しさ 文化×伝統 知的好奇心×趣味性
☐鉄道×水辺 赤レンガ×石橋

■施設の仕掛け(企画時)

ecute

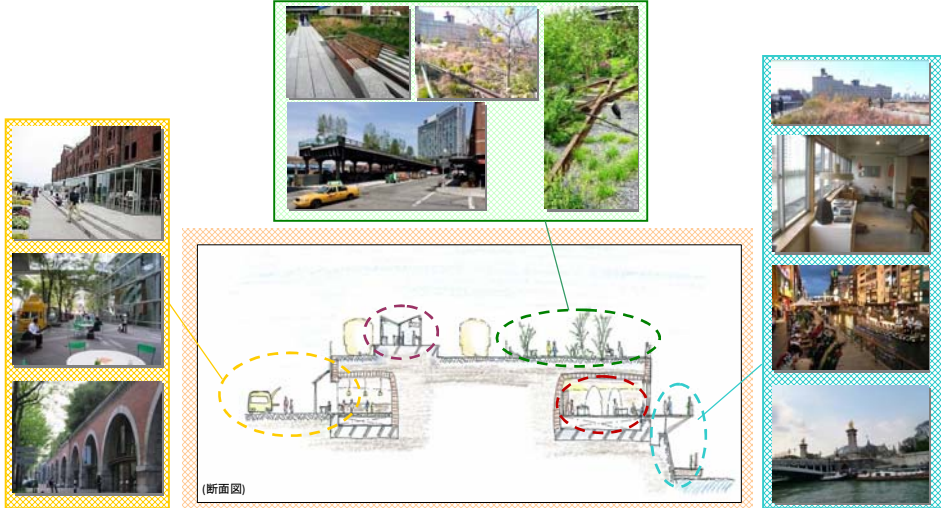
公開空地の
活用

旧プラット
ホームの
活用

留置線の
活用

アーチ空間
レンガ空間
の活用

水辺空間の
活用



■施設の仕掛け(現状)

ecute

進行

公開空地の
活用

条例の適用含め、協議進行中

完了

旧プラット
ホームの
活用

建築条件をクリアの上、回遊動線を設置

中断

留置線の
活用

御茶ノ水駅耐震補強工事のため当面は別用途で使用

完了

アーチ空間
レンガ空間
の活用

創意工夫を重ね実現

停滞

水辺空間の
活用

協議を重ねたものの、解決出口が見つからず継続協議
※構造的にはいつでもできる用意アリ



メッセージ集 作成の考え方

目的：学識者、アーティスト、クリエイター、金融、不動産、飲食店等、各界のコメンテーターからなる懇談会の議論の中で発言のあったヒントフレーズや紹介事例、さらに、寄稿文を取りまとめ、広く一般にアピールし水辺とまちの未来創造を支援する。

対象：住民、企業、行政などすべての主体を対象とする。
なお、コメンテーターのバックグラウンドから、コメンター毎にアピール先の主体は異なる。

構成：序論

Ⅰ部（ヒントフレーズ）

Ⅱ部（コメンテーターから寄稿）

参考資料

未来に向けた結び

Ⅰ部（ヒントフレーズ）の作成の考え方：

懇談会の議論の中で発言のあったヒントフレーズを、なるべくそのまま引用することとし、過度な意識、誘導は避ける形にする。

水辺とまちの未来創造プロジェクトは始まったばかりであり、今回のヒントを参考に住民、企業、行政などの多様な主体が動き出してくれることを期待するものであり、現時点で結論を出すことは避け（結論は出せない）、問題提起型、優良事例紹介型のとりまとめ形式とする。

ただし、ヒントフレーズを理解しやすいように、ある程度のストーリー性を持たせて並べる工夫をする。例えば、以下のようなストーリーを考える。

（１）水辺は猥雑で色気があった。日本の水辺は世界に誇れるものであるはず

かつて水辺は猥雑で色気があったにも関わらず、治水重視という時代の要請により水辺は様変わりしていった。しかし、現在でもなお水辺には潜在的に魅力がたくさん詰まっている。

（２）河川空間は公共空間なのに自由に使えない？

日本の河川空間は公共空間であるのに自由に使えないという経験を持った人がたくさんいる。また、そもそも近づこうともしない人もいるようだ。自分たちの手で水辺のまちづくりに関わり、まちに対する誇りと自由度の高い空間を取り戻そう。

(3) 水辺を使い倒して、楽しみ倒す

水辺にはわくわく感があり、楽しみもビジネスも眠っている。「とんでもないこと」と思って尻込みするのではなく、とにかく使い倒して、楽しみ倒そう。

(4) 水辺の産業遺産をクリエイティブに再生する

水辺を再生するには、大規模開発よりも既存の施設をリノベーションすることが有利である。海外で多く見られるように、アーティストやクリエイター、先見性のある企業などが活躍すべき場所である。

(5) 自分たちで水辺を楽しむ礼儀作法をつくる

なんでもありで水辺を無秩序に利用するだけでは、行政との競合は解消しない。最低限のルール、礼儀作法が必要であり、その作法を利用者自ら考えるという自己責任の文化の確立が必要である。

(6) 水辺の利用者、地域住民、行政をつなぐコーディネーターが必要

利用者の思いと行政の管理との間に競合があり、その調整に膨大なエネルギーが消費され、あきらめてしまいがち。また、地元の一部の反対により活動が実現できない場合もある。かつてのテキ屋のように利用者、地域住民、行政をつなぐコーディネーターが必要である。

(7) 行政は縦割りの弊害を解消したり、新しい提案を受け入れる度量を持つ

縦割り行政の弊害により水辺とまちが分断されていたり、中央と地方(現場)の感覚にズレもあったりする。また、行政サイドの公平、公正、中立の姿勢は重要であるが、時代の要請にさらに柔軟に対応していくためには、利用者の意見をよく聞き、共に考える姿勢が求められている。

(8) 持続可能性を担保する資金調達や規制緩和のしくみ

持続可能性を担保するためには、資金調達や規制緩和についてさらに工夫していく必要がある。占用料や使用料の有効活用方策、クラウドファンディング、ファンドレイジングなどの新たな仕組みを検討してみよう。

(9) 未来の水辺に向かってつなげる、育てる

日々目にしているものと記憶をつなげてアプローチすることは共感を得るための重要な視点である。同じ思いを持つものがつながり協働することが大切であり、利用者自らが水辺をつくり、使い、育てることが重要である。

(10) 共感を広げるためには水辺のプロモーションが必要

共感を広げ仲間を増やしていくためには、水辺活動のプロモーションが重要である。また、都市の国際競争力を高めるためには水辺の日本ブランドを発信することが必要である。2020年のオリンピック・パラリンピックは水辺の再生のための最大のチャンスである。

その他：本メッセージ集は、総花的、網羅的な基礎資料と位置付け、今後、住民向け、企業向けなど、アピール先の主体別に概要版や冊子を別途作成することを検討中。

(イメージ案)

水辺から「まち」が、「日本」が変わる！
ー水辺とまちの未来創造メッセージー

平成 26 年○月

水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会

目 次

○序 論

I．懇談会で生まれたヒントフレーズ

- (1) 水辺は猥雑で色気があった。日本の水辺は世界に誇れるものであるはず
- (2) 河川空間は公共空間なのに自由に使えない？
- (3) 水辺を使い倒して、楽しみ倒す
- (4) 水辺の産業遺産をクリエイティブに再生する
- (5) 自分たちで水辺を楽しむ礼儀作法をつくる
- (6) 水辺の利用者、地域住民、行政をつなぐコーディネーターが必要
- (7) 行政は縦割りの弊害を解消したり、新しい提案を受け入れたりする度量をもつ
- (8) 持続可能性を担保する資金調達や規制緩和のしくみ
- (9) 未来の水辺に向かってつなげる、育てる
- (10) 共感を広げるためには、水辺のプロモーションが必要

II．水辺に寄せる思い【各コメンテーターより寄稿 一人1～2頁】

- (1) 陣内 秀信 (2) 井出 玄一 (3) 伊藤 香織 (4) 金井 司
- (5) 岸井 隆幸 (6) 忽那 裕樹 (7) 久米 信行 (8) 紫牟田伸子
- (9) 田中 義宏 (10) 辻田 昌弘 (11) 遠山 正道 (12) 中島 高志

■参考資料

○未来に向けた結び

序 論

■原点

世界の都市には、その都市を代表する川や水辺と周辺の街並みが一体となった、美しく風格のある空間が形成されています。（巻末参考資料1、2）日本においても、水辺は古くは万葉の時代に詠まれた和歌や、浮世絵に描かれた江戸の下町と大川（隅田川）のように、積み重ねられた歴史・文化の奥深さとたゆたえ、川そのものが周辺の街並みと融け合って、地域の代表的な「顔」として美しく風格のある空間を形成していました。（巻末参考資料3）

■荒廃

しかしながら、戦後、高度経済成長等々、治水を中心とした時代の要請に応えるべく水辺は改変され、その一方で、人々の暮らしや街並みは水辺から遠ざかり、かつての地域の「顔」としての美しい姿は喪失してしまいました。多くの日本の都市では、川は効率を重視した排水路と化し、街並みからも背を向けられ、代表的な「顔」としての川や水辺の記憶は徐々に薄れていき、今や絵画や写真でしか見ることは出来ない状況です。（巻末参考資料4）

■萌芽

汚染され悪臭を放った川は、下水道の整備や水質規制といったハードとソフトの両施策により1970年代にはかなり水質が改善されてきました。昭和後期から平成にかけては、「かわまちづくり支援事業」、河川敷地占用許可準則の緩和等（巻末参考資料5）のさらなるハード・ソフト施策の実施により、最近では、民間の開発などにより都市のリノベーションが進められ、各地でシンボルとなるような水辺空間が形成されつつあります。（巻末参考資料6）また、各地で川が持つ豊かな自然や美しい風景を活かして観光により地域振興を図ろうとする動きも活発化してきました。

■再挑戦

2011年の東日本大震災、紀伊半島大水害など防災・減災の重要性は言うまでもなく、公共施設の老朽化対策の重要性も謳われ中、これからは防災と観光、産業、景観、環境など、これらに一体的に取り組み、世界中から人や情報を惹き付ける魅力ある都市の形成が日本のブランド価値を高める最良の手段です。水辺とまちの未来のかたちをデザインし、「つくる」だけでなく「育てる」ことを視野に入れた持続可能な未来の創造が今求められているのです。このたび、水辺、都市のリノベーションに高い関心を持つ、学識者、アーティスト、クリエイター、金融、不動産等々の各界の有識者からなる『水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会』を立ち上げ、未来創造へのヒントをまとめることにしました。（巻末参考資料7）2020年には56年ぶりの東京オリンピック・

パラリンピックの開催が決定しました。国際都市間の競争が激しくなり、日本ブランドを如何にメイキングしていくかがますます重要になってきている中、日本の水辺とまちの未来創造に向けたメッセージを、世界に向けて、そして日本の未来に向けて送ります。

水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会

Ⅰ．懇談会で生まれたヒントフレーズ

(1) 水辺は猥雑で色気があった。日本の水辺は世界に誇れるものであるはず

かつて水辺は猥雑で色気があったにもかかわらず、治水重視という時代の要請により水辺は様変わりしていった。しかし、現在でもなお水辺には潜在的に魅力がたくさん詰まっている。

【懇談会における主な議論】

- ・ 水辺というのは決して河川の区域だけではない。水辺というのは水面があって、その外側のまちも含めて「水辺」である。
- ・ かつて水辺は、歴史や文化、経済、情報の発信の場であり、遊興空間や芝居小屋など、まちの中で猥雑さや色気を備えた賑わい空間を形成していた。
- ・ 日本は水害に対して脆弱な国土であるという宿命がある。戦災のがれき処理等により都心における水辺空間が消失した。高度経済成長期を経て、水質の悪化、親水性の消失とともに、都市域の拡張が進み、水辺は機能と効率のみを求める時代の価値観の犠牲になった。
- ・ 東京の都心の水辺は世界で最も面白い場所でポテンシャルが高い。しかし現時点では、世界で一番自由度が低い。
- ・ 散策、ピクニック、ジョギング、サイクリング、ボートなど気持ちよくなれる場所として、とてつもなく大きな財産がある。
- ・ 水辺は生物多様性の宝庫であり、人間の利便性の追求だけでなく、生態系への配慮も必要である。
- ・ 日本の水辺は歴史・文化が詰まっており、自然も多様である。地域ごとに特色があり、世界に誇れるものであるはずだ。

○江戸時代の水辺

隅田川の両国橋のたもとに見世物小屋が立ち並んでいる。かつての水辺には賑わいがあった。



両国橋夕涼み全図（広重）

○明治時代の水辺

永井荷風は「日和下駄（1915年）」にて、東京の散策を「淫祠」、「樹」、「地図」、「寺」、「水附渡船」、「路地」、「閑地」、「崖」、「坂」、「夕日附富士眺望」の10の切り口で書いており、当時の水辺については、「水附渡船」の章にて、「水は江戸時代より継続して今日においても東京の美観を保つ最も貴重なる要素」「東京市中の散歩において、今日なお比較的興味あるものはやはり水流れ船動き橋かかる処の景色である」と記している。



永井荷風

○高度経済成長期の水辺

➤ 水質の悪化

1961年当時の隅田川（東京）は、“川というよりドブのようだ”、“メタンガスの泡がポコポコと音をたてて浮かび上がっていた”という状況となった。



隅田川

➤ 効率性を優先した河川整備

効率的な治水整備により、三面張にされた河川。建物も河川から背を向けた（神田川）。



神田川

○近年の水辺におけるアクティビティ

近年では、都会的センスにあふれた水辺利用も見られるようになった。



大岡川



隅田川



若洲海浜公園

(2) 河川空間は公共空間なのに自由に使えない？

日本の河川空間は公共空間であるのに自由に使えないという経験を持った人がたくさんいる。また、そもそも近づこうともしない人もいようだ。自分たちの手で水辺のまちづくりに関わり、まちに対する誇りと自由度の高い空間を取り戻そう。

【懇談会における主な議論】

- ・ 河川空間は公共空間なのに自由に使えないし、使おうともしない。みんなの気持ちや体質がそうになってしまっている。
- ・ 日本の水辺も基本的には公共空間であるが、日本では「みんなのもの」となった瞬間に「自分のもの」でなくなってしまう、結局「誰のものでもなくなってしまう」というところがある。
- ・ 「まち」の中の「水辺」であって、その「まち」の価値を高めるために「水辺」をどう使っていくかというところは、「まち」の人に本当は考えてもらわなければならない。
- ・ 世界の都市では水辺をまちの中心としてとらえているところが非常に多く、公共空間として貴重と言える。
- ・ 市民がまちづくりに関わることで、都市に受け入れられているという意識が生まれ、まちに対する誇りが醸成される。
- ・ 自分の手で「住んでみたい」と思えるまちにする。公共空間で都市に「受け入れられている」という実感が重要である。
- ・ 河川の規制緩和（河川敷地占用許可準則の改定）は進んでいるものの一般に浸透していない。
- ・ 日本の歴史を考えると水辺は一番自由度があった。今またルールを作りながら自由度の高い空間にしていくことが重要だ。
- ・ 地域の財産・宝石は何か？「気づき」の視点が大切である。それを地域特性に応じて磨き上げることで地域ブランドが形成される。

○シビックプライドとは

市民が都市に対してもつ自負と愛着である。郷土愛とは異なり、自分はこの都市を構成する一員でここをより良い場所にするために関わっている、という意識を伴う。シビックプライドは、産業革命期のイギリスにおいて、急激な人口集中により都市が大規模な「よそ者」の集まりになったことで、雑多な人たちがまとまる概念として重要視されるようになった。

近年、都市再生の流れの中で再び着目されるようになり、初代・英国地域社会および地方政府大臣のデイヴィッド・ミリバンド氏は 2005 年就任スピーチでシビックプライドに根ざした市民の行動が現代の都市再英の中心にあることを述べ、『シビックプライドは、集団の行動や個人の自発性の原動力である。』と述べている。



デイヴィッド・ミリバンド
(wikipedia より)

○世界の都市：水辺をまちの中心として捉えている

➤ パリ（パリプラーージュ）

夏のバカンスシーズン（約1ヶ月）にセーヌ川河畔の高速道路の通行を止め、人工的なビーチを造成し市民に開放している。2013年には23万人の来場があった。



パリプラーージュ

➤ ニューヨーク

ニューヨークではジョギングをする人が多い。マンハッタンは東をイースト・リバー、西をハドソン・リバーという二つの川に囲まれているが、その川沿いのウォーターフロントはグリーンウェイと呼ばれる公園としてジョギングやサイクリング、インライン・スケートができるように整備されており、人気がある。



ニューヨークでの川沿いのジョギング風景

➤ リヨン

毎年12月8日に、世界各地からのアーティストが光のアート作品を展示し、水辺を含むリヨンの美しい街並みがライトアップされる。ライトアップは現在ではリヨンが世界に誇る産業にもなっている。



リヨン市内



ローヌ川

○市民がシビックプライドを感じる工夫

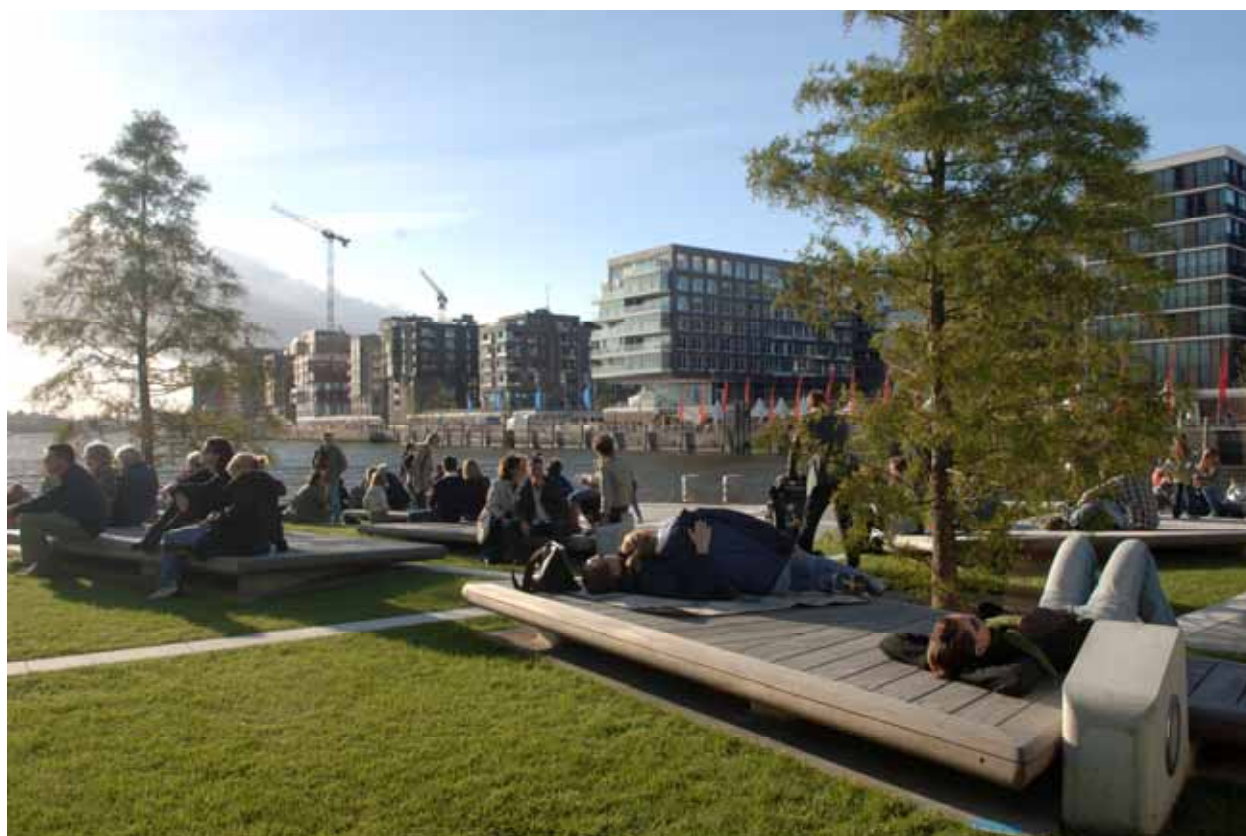
エルベ河沿いの旧関税地区の都市開発。ここですごくおもしろいと思うのは、特にドイツは工事現場を見せる。左の上にあるのが工事現場を見る塔。ドイツでは非常によく行われている。非常におもしろいのは、工事現場を見学するクルーズなんていうことをやっている。水辺とまちの関係をいかにつくっていくのかということを土木工事の間から人々に届けようとしているところが非常におもしろい。工事現場が終わっているところは、全てテラスと呼んでおり、そのテラスで人がまちを眺めている。



工事現場を見る塔



工事現場を見学するクルーズ



工事終了後にテラスとして開放

(3) 水辺を使い倒して、楽しみ倒す

水辺にはわくわく感があり、楽しみもビジネスも眠っている。「とんでもないこと」と思って尻込みするのではなく、とにかく使い倒して、楽しみ倒そう。

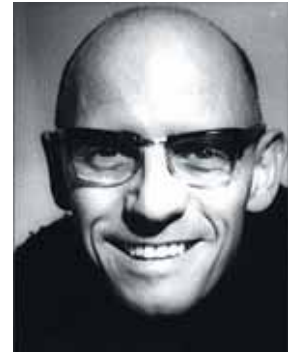
【懇談会における主な議論】

- ・ 水辺にはワクワク感があり、発見行為がある。使い倒して、楽しみ倒すことが重要である。
- ・ 水辺が楽しいというのは、河川の周辺のまちを使いこなすのが楽しいということである。
- ・ 東京の水辺は、イベントや舟運などソフト面はよくなってきたが、これまでまちづくりや河川に関する事業部局はあまり積極的ではなかった。また、大阪と異なり、民間企業があまり参加しなかったことが問題だった。
- ・ 大阪の取組みの発端は、東京への対抗意識という面もあるが、当時の、都会を元気にしなければ日本はよくならないという流れに乗ろう、という経済界と行政のメリットが一致した。
- ・ 近年、水辺の利用形態が多様化し、様々な工夫・取組が拡大している。また、水辺を利用したビジネスも始動している。
- ・ 諸外国では船が通勤手段など日常生活にとけ込んでいる。また、船には移動手段以上に別の機能があり、ミシェル・フーコーは「ヘトロピア（日常の延長線上にあるが日常から切り離された理想郷）」の例として船を挙げている。時には人と人をつなげるコミュニケーションツールの役目も果たす。オリンピックを契機に舟運・水運の見直しがきっかけになるとよい。
- ・ 水辺は散策などの日常的空間と観光などの非日常的空間の2つの側面があり、後者は外からの人にとどのようにアピールするかなどが重要になる。
- ・ アートやクリエイティブ性との相性が良いという点では、水辺を使いこなす上で、「常識を疑う」ということと「個人にフォーカスする」ということがポイントになるだろう。
- ・ 水辺では「都市の水辺に新しい水上経験をつくる」「川に背を向けているまちを川に向ける。川を表側にする。」「水辺の使いこなしをイベントという形で、継続的に、毎日の日常化につなげる。」「水上ホテル、劇場、パフォーマーの結集など、様々な活動を水辺で実現して、規制緩和の嵐を吹かせたい。」など、様々な活動、取組みがなされ、企画されている。
- ・ いいものを作っても水辺に人が来なかったらだめで、地元の元気な人と、よそ者、若者、ばか者が1～2割くらいの人が水辺に大集合するような仕組みを水辺で作るとよい。
- ・ 水辺にしか無い価値を考えると、賑わいをつくる事、ビジネスが成り立つ事、可能性は色々あるはずだ。
- ・ ノウハウ、知識、実績の共有が必要で、成功事例も失敗事例も次につなげることが大切である。
- ・ 「とんでもないこと」と思って尻込みしたら何も進まない。「水辺は自由に利用できないはず」という固定観念を払拭することが重要だ。

○船

➤ ヘテロトピア：

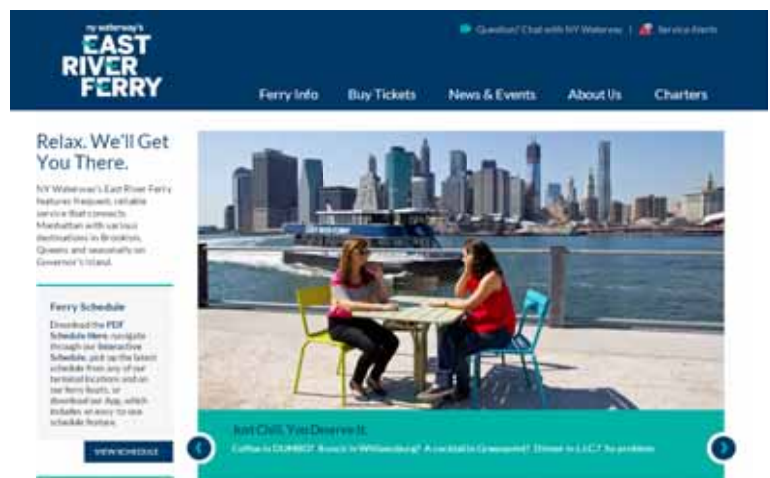
フランス哲学者のミシェル・フーコー（1926 年-1984 年）は、「日常の延長線上にあるが、日常から切り離された理想郷」として、「ヘテロトピア（Heterotopia）」という概念を提唱した。ヘテロトピアの例として、博物館、図書館、学校、病院、テーマパークなどとともに、船を挙げている。



ミシェル・フーコー

➤ イーストリバーフェリー：

ニューヨークのブルックリンとミッドタウンの間に 2011 年より運航。交通の便の悪いところを結び、20 分おきの運航、プラス1ドルで自転車持ち込み可能、船着場から無料シャトルバス運航などもあり、通勤に利用されている。運航によって不動産価値が上がるという効果も生み出している。片道4ドル。



イーストリバーフェリーHP

➤ 水辺クルーズ



神田アイランドクルーズ



東京低地クルーズ

○新しい水上経験

一般社団法人ボート・ピープル・アソシエーションはこのような都市に新しい水上経験をつくることをテーマに様々な水上イベント等に関する活動をしている。SUP（サップ）はその一つで Stand Up Paddle の略。ウォータースポーツの一つで、サーフボードの上に立ち、オール（パドル）を使って漕ぐ乗り方。同法人は、SUP はすごくハードルが低く、誰でもすぐに乗れ、これまでのボートなどとは異なり、船好き、川好きでない「一般の人」が活動を始めているため、すごくポテンシャルがあると考えている。

また、東京で大地震が発生し陸上交通が完全に麻痺した場合の救助や救援物資運搬の水上交通の可能性について、「B0 菜（ボーサイ）」という東京湾の各地から食材を船で運び、都心の水辺で朝市を開催するというイベントを実施した。船着場がない箇所では、橋から野菜の受渡しを行った。



大岡川（横浜市）でのSUPの風景



B0菜：野菜の積込（左）と船着場の無い場所での受渡し（右）

○水辺のカフェ



水辺のオープンカフェ（左：京橋川（広島市）、右：堀川（名古屋市））



水辺のカフェ（左：隅田川（東京都）、右：北浜テラス（大阪市））

○イベント



ラバーダック



水辺で結婚式（中之島公園）



淀川のゴミだけで作った金チヌ（中之島公園）



水質浄化“ゴルフボール”を打ち込むイベント



「四十七人のオバチャーン」
水都大阪フェスのイベント

○砂浜美術館（Tシャツアート展）

ハコモノじゃない美術館。何がいいかって、作品も全部公募で参加型だから、子どもが作品応募したら必ずファミリーでやってくる。で、歩いて探して自分の家族の作品の前で写真を撮って海で遊んで帰る。そして思い出が残る、というイベント。

「私たちの町には美術館はありません。美しい砂浜が美術館です。」（ホームページより）



砂浜美術館（高知県黒潮町）

○下町の路地裏ガーデニング

墨田区名物のゲリラガーデニング。これが名物で、観光客はみんなおもしろがる。外国人もおもしろがる。そこには必ずおばあちゃんがセットでついており、「きれいね」と言うはずと話してくれる。おもてなししてくれる。もしも川沿いでやったら、みんなこうやって世話してくれるし、色んなコミュニケーションが生まれるかもしれない。



下町の道路に広がる緑（墨田区）

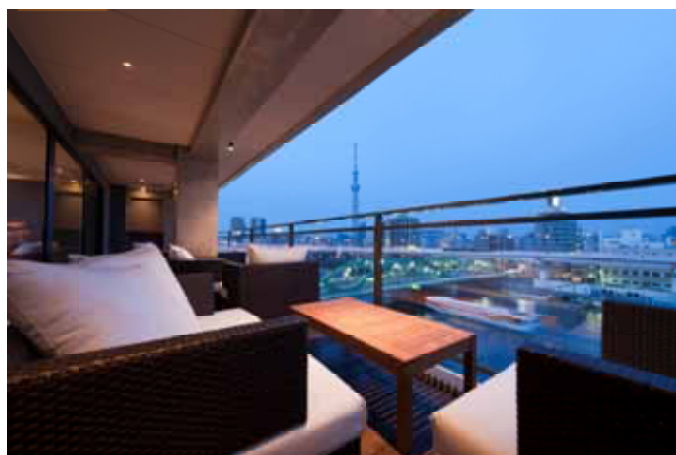
(4) 水辺の産業遺産をクリエイティブに再生する

水辺を再生するには、大規模開発よりも既存の施設をリノベーションすることが有利である。海外で多く見られるように、アーティストやクリエイター、先見性のある企業などが活躍すべき場所である。

【懇談会における主な議論】

- ・ かつての日本の水辺では、舟運、観光資源、商取引の場であり、様々な経済活動が行われていた。
- ・ 海外では、水辺にアーティスト、クリエイターに加え、先を見るビジョンを持っている企業などが集まり、経済活動とクリエイティブ性・アート性が一体となった空間を形成している。また、ニューヨークでは、イーストリバーにフェリーが運航することにより不動産価値があがっているという例もある。
- ・ 水辺の経済活動を盛んにするためには、キャッシュフローの確保が必要である。再生エネルギーの全量買取制度の導入で、誰も見向きがしなかった土地ほどメガソーラーの土地に適するということで突然キャッシュフローが生み出された例もあるが、やり方によっては無から有が生まれる。
- ・ 既存の建築物が立ち並ぶ水辺の再構築には、キャッシュフローを向上させる水辺のリノベーションがポイントになる。
- ・ 水辺の産業遺産である大きな倉庫や造船所などが美術館やレストランにリノベーションされている例もある。
- ・ 既存の建物の方が、新しい建物よりも広々としており、クリエイティブな利用が可能である。アーティストやクリエイターが躍動できる場を与えてみるのがポイントである。また、経済的にもその方が優位である。
- ・ 経済論理というのは、大企業の経済論理になっている場合が多いが、同じことを行っても、中小企業であれば経済的に成り立つこともある。現在の「リノベーションの時代」には、小回りがきく方が適合しやすい。
- ・ 大規模開発であれば大企業で十分対応可能であるが、大規模な商業施設やマンションだけでは“猥雑さ”といった面白味に欠けるという面もある。
- ・ 地域固有の歴史・文化（日本らしさ）を活かしつつ、クリエイティブ性やアート性を備えた新たな情報発信地として再生（水辺のリノベーション）し、ブランド化しよう。

○水辺のリノベーション



水辺の倉庫を飲食店にリノベーション（シエロイリオ：左_改装前、右_改装後）



水辺の倉庫をショールームにリノベーション
（ザ ナチュラルシューズストア ショールーム：
隅田川）



東京港の運河に放置されていたバージ船（物資運搬船）を改装し、運河に浮かぶ異次元空間バーとしてプロデュース。



大阪道頓堀川 湊町リバープレイス（左_改装前、右_改装後）

(5) 自分たちで水辺を楽しむ礼儀作法をつくる

なんでもありで水辺を無秩序に利用するだけでは、行政との競合は解消しない。最低限のルール、礼儀作法が必要であり、その作法を利用者自ら考えるという自己責任の文化の確立が必要である。

【懇談会における主な議論】

- ・ ヨーロッパでは、市民のものとしての公共空間の整備が進められ、同時に、市民が「他人事（ひとごと）」ではなく「自分たちごと」として公共空間を楽しむ作法が市民に届けられている。この二つがないと公共空間は、どんどん商業ベースになってしまい、どんどん汚くなっていく。
- ・ 我が国では、行政は「管理する」という意識が強く、また市民は「法に守られている」という意識が強いため、市民が自分たちで個別に作法やルールをつくって楽しんだり実行したりする機会が少ない。
- ・ ピクニックは開放感があって楽しいことに加え、社交の場のコミュニケーションの中から、新しい発見があったり、ごく自然にその場所への愛着が湧いたり、作法が身に着く。
- ・ 例えば、あるスキー場では「指定エリア以外も自由に滑ってよい、そのかわりレスキュー代は自己負担」という自己責任の概念をはっきり導入したところ、海外から人が殺到し、大変な賑わいとなっている。
- ・ 水辺を利用する側の「自己責任」の文化が確立すると、公共空間のあり方（施設のつくり方、使い方の自由度など）も変わるはずだ。

○市民が“自分たち事”として公共空間を楽しむ工夫

ヨーロッパでは、公共空間の工事現場を公開することで、「水辺とまちの関係をいかにつくっていくのか」ということを土木工事を行っている最中から人々に届けようとしている。



ハーフェンシティ（ドイツ）

○水辺のピクニックで公共空間を自分たちの手に取り戻す

東京ピクニッククラブ※では、社交の場としての都市の緑地や共有スペースなどの利用可能性を追求している。水辺でのピクニックは、ものすごく開放感があり、まちや水辺と人々が近づくのに非常に良いツールと考えられる。誰にも使われなくなった水辺という公共空間でピクニックをすることにより、水辺と人との距離を近づけることができる。

※東京ピクニッククラブ：2002年にピクニック生誕200年を記念して結成。メンバーは建築家、都市計画家、ランドスケープアーキテクト、フードコーディネーター、イラストレーター、写真家、グラフィックデザイナー、編集者、キュレーター、プランナーなど。ピクニックの原形を歴史に探りつつ、多彩なクリエイターのコラボレーションによって、自由に洗練された現代のピクニックの姿を提案する。



旧岩淵水門公園

(6) 水辺の利用者、地域住民、行政をつなぐコーディネーターが必要

利用者の思いと行政の管理との間に競合があり、その調整に膨大なエネルギーが消費され、あきらめてしまいがち。また、地元の一部の反対により実現できない場合もある。かつてのテキ屋のように利用者、地域住民、行政をつなぐコーディネーターが必要である。

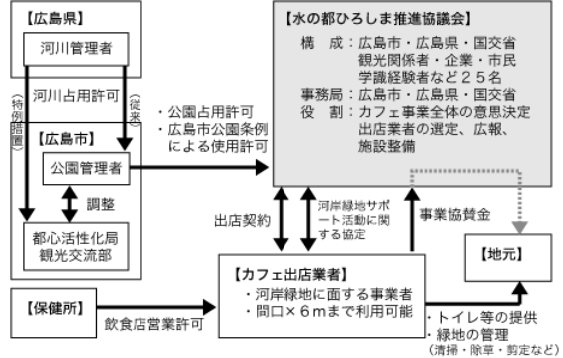
【懇談会における主な議論】

- ・ かつては、地元有力者やテキ屋が、水辺に関わる様々な利害の対立を水面下で調整する役割を担っていたことにより地域の秩序が維持されていた。一方、現在では、河川法が利害調整の一部を担うようになったことなどにより、水辺の利用者、地域住民、河川管理者を含む行政の間でギャップが発生している。
- ・ 水辺利用者の「なぜダメなのか」という思いと、行政の「事故が起きたらどうするのか」、「この人だけに許可してもよいのか」という思いの競合がある。
- ・ 「横にあるマンションのたった一人がNOというとな実現できない」というように、イベントや商業で水辺を利用したい側と地域住民との間にもギャップが存在する。社会全体の福祉の増進、地域の活性化のために、場合によっては、個人のエゴを捨てるための意識改革が必要だ。
- ・ 行政側もやりたいというエネルギーがある人と協力して継続的にやりたいと考えている。例えば水都大阪のように、昔は行政のみで進めていたものが、民間の提案を取り入れる仕組みに変わってきた例もある。包括的に調整できる民間の占有者が入ることも一つの手である。
- ・ 一定の水辺を利用する作法を確立した上で、自由利用を確保するため、利用者、地域住民、行政の各主体の隙間を通訳する「水辺のコーディネーター」が必要だ。

○地域との合意形成

➤ 京橋川オープンカフェ（広島市）

広島市では、地元に対しては、実施候補地の決定後に説明を行い、理解を求める形となった。当時は先行事例がなく計画のイメージを住民に伝えにくいという、マスコミに「屋台」を設置すると報道されたこともあり、一部の住民からは、設置による地域の環境悪化を懸念され、根強い反対を受けた。このため、オープンカフェ設置エリアの縮小、営業時間の短縮、出店者の営業マナーの評価、不法駐車・駐輪対策等を行うことについて協議会と地元とで調整し、地域の合意を図った。

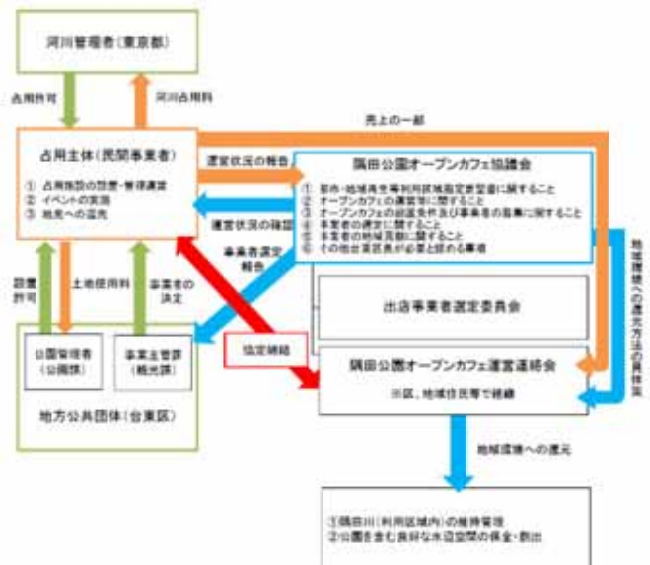


※カフェ出店業者は「公開空地」「通り抜け通路」「公共トイレ」のいずれかを民有地内に設け、地域に提供する。
※事業協賛金は推進協議会が地域に再投資する。
※カフェ経営は出店業者の独立採算

京橋川オープンカフェ事業スキーム

➤ 隅田川オープンカフェ（東京都台東区）

台東区では、現オープンカフェの実施前に近傍でオープンカフェモデル事業を実施し、利用者の好意的な反応が多かったものの、地元説明会では近隣住民より、「眺望が妨げられる」「ゴミが散乱する」などの意見が出された。その後1年以上に渡る意見交換会の結果、住民による自主的な検討会も組織され、協議会への要望書が提出された。それを受け、学識経験者、地元住民、商店街、税理士、区議会議員、河川管理者、台東区による「隅田公園オープンカフェ協議会」を設置し、地域の合意形成を図った。協議会では8ヶ月で合計8回の会議を実施し、近隣住民からの要望を十分に踏まえて、オープンカフェ事業者の募集・選定を行い、開業後は、協議会の下部組織となる運営連絡会が、事業者及び地元とともに地域活性化に向けた活動を行っている。



隅田川オープンカフェ事業スキーム

○行政主導から民間主導へ

大阪府市の共通戦略である「大阪都市魅力創造戦略」における重点取り組みの一つとして、水と光の魅力で世界の都市間競争に打ち勝つ「水と光の首都大阪」の実現に向け、平成 25 年度から、新たな推進体制を構築している。水と光の取り組みの基本方針を一体的に審議する「水と光のまちづくり推進会議」のもと、民主導の事業推進組織「水都大阪パートナーズ」と、その活動を支える「水都大阪オーソリティ」を設置し、更にパートナーズを人的・物的に支援する経済界と共に、世界に発信する都市魅力創出に取り組んでいる。パートナーズは民間から公募・選定され、オーソリティは行政の一元的な窓口を目的とした府市合同の組織である。

	推進体制（H25年度～）	備 考
決定機関	水と光のまちづくり推進会議 構成員 大阪府知事、大阪市長、大阪商工会議所会頭 関西経済連合会会長、関西経済同友会代表幹事 大阪府都市魅力戦略推進会議会長 推進会議が設置 アドバイザーボード(専門助言機関) 企業家、学識経験者、ジャーナリスト 基本方針の提示 事業評価の実施 等 助言等を実施	◇水と光のまちづくりに関する取り組みの基本方針の策定 ◇水都大阪パートナーズの運営者の選定 ◇水都大阪パートナーズの事業の支援、事業評価
執行機関	水都大阪パートナーズ 国内外の豊富なビジネス経験を有する方や、水都大阪2009以降、常に水都大阪の取り組みに携わっている方など、多岐にわたるノウハウ・経験を有する斬新な運営メンバーで構成 【事業内容】 ・新たなシンボル空間創造、エリアマネジメントの推進（BID手法の活用等） ・水辺の賑わいづくり(水都フェス等)・社会実験の推進 ・水と光の首都大阪のブランドイメージ発信 ※水都大阪パートナーズ：H25公募により選定した民間組織 複数年（4年）の運営を前提としているが、実績評価は毎年実施する。 府・市・経済界が一体となり 取り組みを支援	◇民主導の水都事業推進組織 ◇プロ人材が運営に参画 ◇収益事業も積極的に展開（自ラ稼ぐ） ◇評価システムを導入（PDCAの徹底） ◇基本的な人、モノ、資金は、府・市・経済界が支援
行政・経済界の関わり方	＜行政＞ 水と光のまちづくり支援本部（水都大阪オーソリティ）を設置（H25） ⇒ 水辺空間の活用に関する行政の一元的な窓口（府市合同の事務局） ＜経済界＞ 水都大阪パートナーズに対し人的・物的支援を展開（H25実績 2人配属）	◇水と光に関わる民間活動を府・市・経済界が強力に支援

水都大阪 推進体制

(7) 行政は縦割りの弊害を解消したり、新しい提案を受け入れたりする度量をもつ

縦割り行政の弊害により水辺とまちが分断されていたり、中央と地方（現場）の感覚にズレもあったりする。また、行政サイドの公平、公正、中立の姿勢は重要であるが、時代の要請にさらに柔軟に対応していくためには、利用者の意見をよく聞き、共に考える姿勢が求められている。

【懇談会における主な議論】

- ・ 水辺は都市、公園、下水道、道路と河川、港湾など様々な分野の行政が関わるところであり、縦割り行政の結果分断されているところも多い。
- ・ 水辺を活用したいという想いややる気のある人が、どこに相談に行ったら良いのかさえわからない。
- ・ 行政内ではある部署で先進的な取組ができそうな流れになっても、別の部署の反対によって実現しないことがある。実際に具体の取組を実施する段になっても、どの部署が何の経費を負担すべきかなどで進まなくなることもある。
- ・ 先進的な取組を成功させた自治体では、行政内に横断的なプロジェクトチームを作って、総合調整を担った例もある。
- ・ 同一の分野においても、中央における発想・方針と現場事務所の実際の管理における感覚とにずれがある。
- ・ 日本では、「安全第一」「まちを洪水から守る」というのは絶対的な命題だが、貴重なオープンスペースでもあり、「守りながら、けれどもうまく活用できる形式」ということで、スーパー堤防や水位低下の河川などの例がある。
- ・ 行政は、これまでの取り組みや仕事の誇りを市民にキッチリと伝える必要がある。その上で、「絶対に譲れない（管理が必要な）ところ」と、「創造力があれば（利用の際に）自由度があるところ」を分けて管理することが大切である。
- ・ 市民による水辺を楽しむ作法の浸透度合いや社会的モラルの成熟度等によっては、河川管理者は自由度に対する許容レベルを下げるのが可能となるはずである。
- ・ 新たなものを前向きに支援する度量や、受け入れやすさを確保するための窓口の設置など、自己責任で使いこなすことを応援することが必要である。
- ・ 行政（河川管理者等）はプレーヤーの一人として、地域ブランドを育てていくことも重要な役割である。加えて、河川やまちづくりに関する多様な情報を持っており、水辺のリノベーションには欠かせない存在と言える。
- ・ 河川以外の公園や道路、都市、建築でも規制緩和はできていない。また、河川以外の周りのことも一緒になってやり、大きな行政目的を河川行政も担うという土壌を創らないと、管理的な問題は解決しない。その意味で交流人事という仕組みも有効である。

(8) 持続可能性を担保する資金調達や規制緩和のしくみ

持続可能性を担保するためには、資金調達や規制緩和についてさらに工夫していく必要がある。占用料や使用料の有効活用方策、クラウドファウンディング、ファンディングなどの新たな仕組みを検討してみよう。

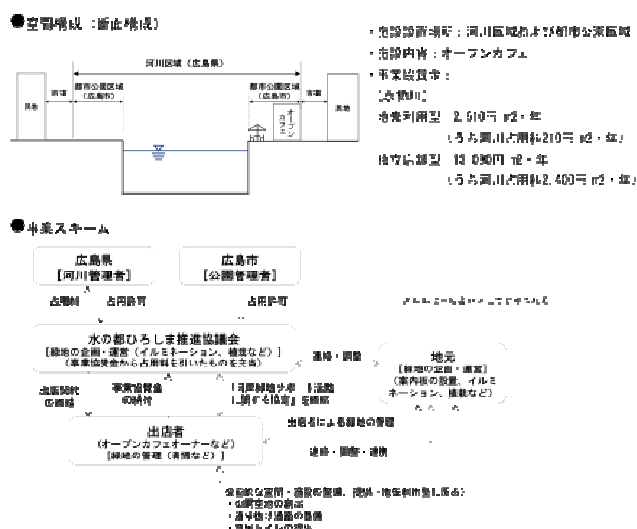
【懇談会における主な議論】

- ・ 厳しい財政のなかで、都市の水辺での賑わい創出には、民間参入と民間による社会貢献など持続可能な仕組みづくりが必要である。
- ・ 河川の占用料や使用料を維持管理や地域貢献に活用できるようにすることを検討する必要がある。
- ・ 水辺の利活用で利益を生むことができれば、イベント時の保険の仕組みや一体的なプロモーションも可能になる。水都大阪では、それを牽引する規制緩和を含めた概念や BID などのオペレーションを提案している。
- ・ 行政任せではなく、市民や民間などがベンチ等の施設を寄贈するなど、クラウドファンディングの可能性も模索していくと良いだろう。
- ・ 市民にとっては、お金を使わないでファンドレイジングしながら面白いことをやる、ということも重要になってくる。

○河川の占用料

河川敷を占用して使用する際には、占用者が許可を受け、占用料を支払って使用している。

広島市の京橋川・元安川では、「水の都ひろしま推進協議会」（有識者、市民団体等、経済・観光業者、行政で構成）が、河川敷の一括占用許可を受けている。その上で、カフェ出店希望者から使用料を徴収して貸し出す仕組みを作っており、この使用料の一部は、緑地の管理やイベントの運営に利用されている。



占用料と使用料の仕組みの例（広島市）

○クラウドファンディング

クラウドファンディング（英語：crowd funding）とは、ある目的、志などのため不特定多数の人から資金を集める行為、またそのためのネットサービスのこと。群衆（crowd）と資金調達（funding）を組み合わせた造語

○ファンドレイジング

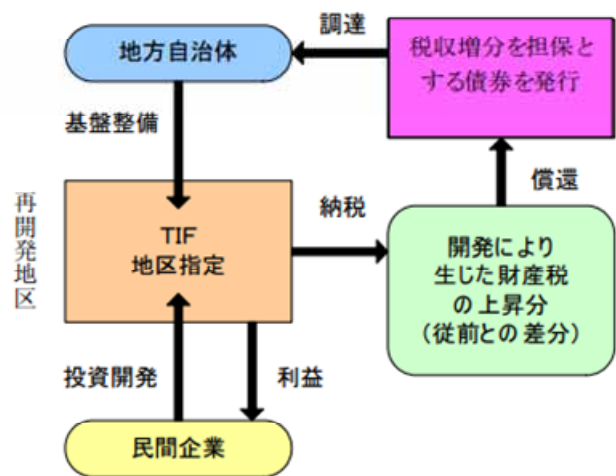
ファンドレイジング（Fundraising）とは、民間非営利団体（Non-Profit Organizations：日本では公益法人、特定非営利活動法人、大学法人、社会福祉法人などを含む）が、活動のための資金を個人、法人、政府などから集める行為の総称。主に民間非営利組織の資金集めについて使われる用語であるが、投資家や民間企業に関連する資金集めに使われる場合もある。

○BID

Business Improvement Districtの略。アメリカの主にビジネス地域において資産所有者、事業者が地域の発展を目指して必要が事業を行うための組織化と財源調達の仕組み。

○TIF

Tax Increment Financingの略。固定資産税等の税収増を担保とする債券を発行することで、都市整備の開発利益を必要な基盤整備費に還元する資金調達法。



TIFの仕組み

(9) 未来の水辺に向かってつなげる、育てる

日々目にしているものと記憶をつなげてアプローチすることは共感を得るための重要な視点である。同じ思いを持つものがつながり協働することが大切であり、利用者自らが水辺をつくり、使い、育てることが重要である。

【懇談会における主な議論】

- ・ 多くの市民の共感を得るには、日々目にしているものと記憶とをどのようにつなげてアプローチしていくかということを念頭に、まちづくり・水辺づくりの計画をいつ、どのように、どうやって地域に伝えていくかが重要である。人に伝えるときには、モデル事業がすごく重要である。
- ・ 単独で考えていても、利害対立者も含めて人とのつながりがなければ、いいものも進まない。
- ・ ひとつのきっかけがあれば、多くのクリエイティブな人達が関係を持てる。色々な人達が出会い、水辺とその周辺地域と連動するような仕組みづくりが必要である。
- ・ 行政からの上から目線だと市民は絶対反応しない。「助けて」、「力を貸して」と言うと、みんな反応する。
- ・ 市民や利用者側も、行政管理にまかせっきりで陳情ばかりしている状況を変え、自己責任を持つという前提にすると、水辺のあり方も変わるだろう。
- ・ エリアマネジメントを推進していくということと、地元住民・利用者・企業・河川管理者など地域全体で、その水辺をどうしていくのかのビジョン・コンセプトを共有することが重要である。
- ・ 行政が大きなグランドビジョンを示し、イニシアチブを取ることも必要。

(10) 共感を広げるためには水辺のプロモーションが必要

共感を広げ仲間を増やしていくためには、水辺活動のプロモーションが重要である。また、都市の国際競争力を高めるためには水辺の日本ブランドを発信することが必要である。2020年のオリンピック・パラリンピックは水辺の再生のための最大のチャンスである。

【懇談会における主な議論】

- ・ これからは不特定多数の「誰か」ではなく、個人の行動や個人の思いなど、「個人」の視点が大切となり、それを伝えるところにメディアやコーディネーターの役割がある。
- ・ 一般市民にもわかりやすい水辺活動のプロモーションにより、仕組みづくりや行動のきっかけが生み出せる。
- ・ 都市の国際競争力を高めるのは、水辺におけるクリエイティブ性やアート性と言える。
- ・ 2020年のオリンピックは、水辺の景観や賑わいづくり、舟運の復活などに着目して取り組む良い契機である。
- ・ 水辺の未来を造る人が集い、共に動き出す。市民・企業・行政の三位一体となった取り組みが重要である。
- ・ 我が国の水辺とまちをもっと輝かせるために、「かたる」「つなぐ」「ためす」「つくる」「そだてる」というコンセプトのもと、水辺とまちと人をつなぐ輪を広げていこう。

○2020年の東京オリンピックは絶好のチャンス

2020年のオリンピックでは、臨海部に選手村やメディアセンター、多数の競技会場が配置される予定である。ロンドンオリンピックでは、テムズ川に五輪シンボルマークを浮かべる、ベッカム選手が高速ボートで聖火を運ぶなど、テムズ川が注目を浴びた。同様に、東京を代表する河川、隅田川にふさわしい景観を形成するとともに、観客やプレス関係者を舟運により運ぶ、恒常的にぎわいを創出するなどの施策を進める絶好のチャンスである。



東京オリンピックの競技会場配置（案）

II. 水辺に寄せる思い



(1) ○○ ○○

(一般社団法人〇〇〇〇、〇〇〇〇)

[illegible][illegible]

図表、写真

■参考資料

1. 世界の水辺

世界の都市には、その都市を代表する川や水辺と周辺の街並みが一体となった、美しく風格のある空間が形成されています。

品格のある水辺



プリンス運河 (オランダ)

統一感のある水辺の景観



ヤラ川 (オーストラリア)

エリアでのマネージメント



セーヌ川 (フランス)

街並みにふさわしい水辺利用



ニューハウ運河 (デンマーク)

居心地の良い水辺空間



ライン川 (ドイツ)

2. 世界の水辺利用の実例

フランス・パリ（セーヌ川）：パリプラーージュ

- 夏のバカンスシーズンに高速道路の通行を止め、人工的なビーチを造成し市民に開放

開催期間：夏季1ヶ月間

（2013年7月20日～8月18日）

来客者数：23万人（2013年実績）



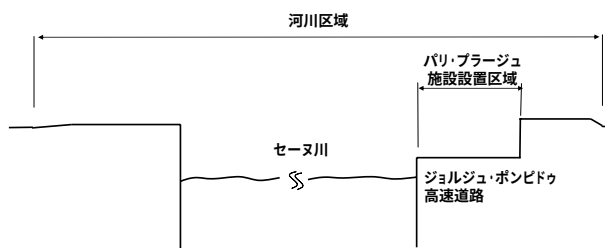
普段の高速道路の様子



パリプラーージュの様子

（著作権者：slasher-fun、ライセンス：Cc-by-sa-3.0）

●空間構成（断面構成）



- ・施設設置場所：河川区域内の高速道路（セーヌ川右岸）

- ・施設内容：

ヤシの木、ビーチパラソル、ビーチチェア、
屋外のクライミング壁、屋外のカフェ、
軽食スタンド、レンタル自転車、人工の砂浜、
砂浜や水面を使ったカヌー、手漕ぎボート、
水上レストランなど。

- ・入場料は無料（カフェ、レストラン、
売店、アトラクション使用料等は別）

テムズ川 (ロンドン)

- 1988年の「一般開発令」により、用途変更の自由度を広げたこと等で、河川沿いの工場や倉庫が、事務所へとコンバージョンが進んだ。
- 毎年秋に行われる川をテーマとする芸術と教育の祭典テムズフェスティバルが行われ、多くの参加者がいる。



クイーンハイス港からステイルヤード
Google ストリートビューより転載

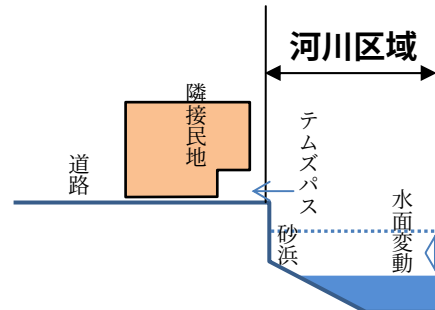


テムズフェスティバル
出典: The Mayor's Thames Festival ホームページ



テムズパス

Google ストリートビューより転載



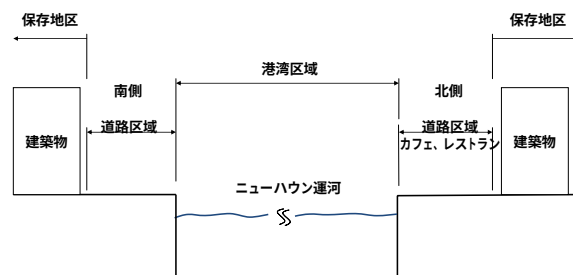
川沿いにパブリックフットパスの一つである「テムズパス」と呼ばれる遊歩道があり、川沿いの民地でも一部が遊歩道や建物内通路（アーケード）として解放されている。テムズパスは、源流部から河口部まで、一部には川辺を離れる箇所もあるが、ほぼ川沿いに続いている。

デンマーク・コペンハーゲン（ニューハウン運河）

■ ニューハウン（新たな港を意味する）沿いは、期間限定の歩行者天国とすることでカフェ・レストランやアンティークショップが軒を連ね、多くの観光客が来訪している。オープンカフェ設置基準で利用範囲等を規定している。



● 空間構成（断面構成）



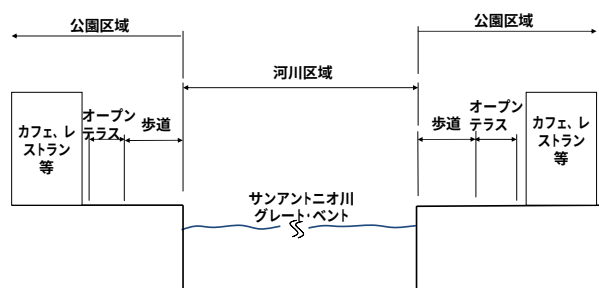
- ・施設設置場所：道路区域（ストロイエ：歩行者天国）
- ・施設内容：カフェ、レストラン（北側）
- ・コペンハーゲンのストロイエ（歩行者天国）で
カフェ、売店等が市に払う使用料は平均3,900円/月・m2

アメリカ・サンアントニオ（サンアントニオ川）

- サン・アントニオ川の蛇行部を直線化し、水門で区切って洪水対策を施し、残された蛇行部（グレート・ベント）にリバーウォークを整備し、囲まれたエリアにホテル・コンベンションセンター・複合施設を建設して、全米屈指の観光都市に発展。（観光客数は約1千万人／年）



● 空間構成（断面構成）



- ・施設設置場所：公園区域
- ・施設内容：
 - オープンテラスを設置したカフェ・レストラン
 - 普通のカフェ・レストラン（オープンテラス無し）
 - 観光者用施設
 - ホテル
 - リバーボート等

3. 江戸の水辺

日本においても、水辺は古くは万葉の時代に詠まれた和歌や、浮世絵に描かれた江戸の下町と大川（隅田川）のように、積み重ねられた歴史・文化の奥深さとたゆたえ、川そのものが周辺の街並みと融け合って、地域の代表的な「顔」として美しく風格のある空間を形成していました。



江戸期の隅田川・両国橋



江戸期の日本橋川－1



江戸期の日本橋川－2

4. 近年の日本の水辺（荒廃期）

戦後、高度経済成長等々、治水を中心とした時代の要請に応えるべく水辺は改変され、その一方で、人々の暮らしや街並みは水辺から遠ざかり、かつての地域の「顔」としての美しい姿は喪失してしまいました。多くの日本の都市では、川は効率を重視した排水路と化し、街並みからも背を向けられ、代表的な「顔」としての川や水辺の記憶は徐々に薄れていき、今や絵画や写真でしか見ることは出来ない状況です。



1960年代：悪臭を放つ川（隅田川）



現在：川に背を向けた街（神田川）



1970年代：水質汚濁が進み泡立つ川（多摩川）



現在：ゴミが投棄された川（境川）



1970年代：水汚濁が進みスカム（浮きかす）が浮かぶ川（綾瀬川）

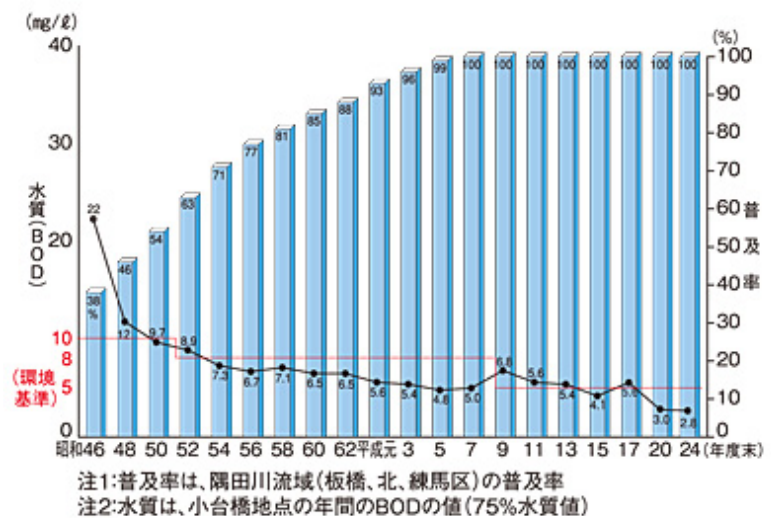
5. 日本の水辺（萌芽期）

汚染され悪臭を放った川は、下水道の整備や水質規制といったハードとソフトの両施策により 1970 年代にはかなり水質が改善されてきました。昭和後期から平成にかけては、「かわまちづくり支援事業」、河川敷地占用許可準則の緩和等が行われ、少しずつ川と人々が近づきつつあります。

下水道の普及と河川水質

下水道の普及に伴い、河川の水質も改善している。

図は、隅田川の例だが、一時は悪臭を放っていた川も流域の下水道の普及により、徐々に水質が改善された。



(出典：東京都の下水道 2013)

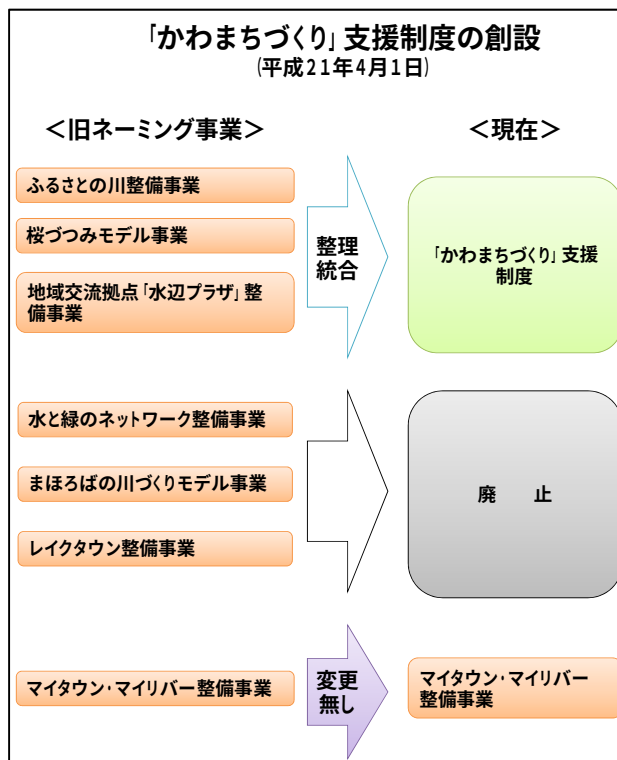
川を活かしたまちづくりの推進

国土交通省では、昭和60年代から、各時代の情勢に応じて「ふるさとの川整備事業」や「桜つつみモデル事業」等の多種多様な河川事業制度によって、地域の河川利用を推進する取り組みを支援してきた。

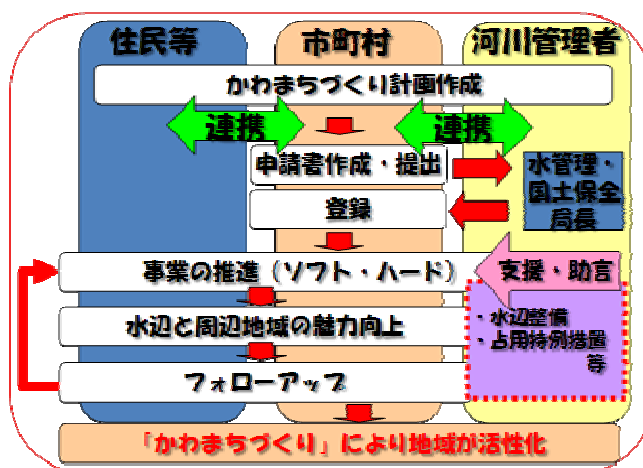
平成21年度に創設された「かわまちづくり」支援制度は、それまでの各種事業制度を発展的に統合して誕生した。

「かわまちづくり」とは、河川空間とまちの空間の融合が図られた、良好な空間形成を目指す取り組みをいう。当該支援制度では、観光等の活性化につながる景観・歴史・文化等の地域の「資源」や地域の「知恵」を活かし、市町村等が河川管理者や地元住民と連携して作成する

水辺の整備・利活用計画（かわまちづくり計画）に基づく取り組みに対して、河川管理者がハード・ソフト面での支援を行うものである。従来の各種事業制度では、拠点や個別区間での利活用増進を目標としたハード整備による支援が主だったのに対し、「かわまちづくり」支援制度では、より広域の「まち全体」を視野に入れ、地域活性化に資する河川空間利用を支援することを目指している。



川を活かしたまちづくりに関する制度



かわまちづくり支援制度のスキーム

從 前

- 特例措置
(社会実験)

-
- A photograph of a Japanese street festival (Matsuri) at night. The scene is filled with colorful floats (dashi) decorated with lights and traditional motifs, moving along a street lined with spectators. The atmosphere is festive and brightly lit by the festival's lights and street lamps.

一部改正

-
- 河川空間利用時のイメージ
- 観光船
- イベント用階段 (照明等)
- 切り売場 (船着き場並行のみ)
- オープンカフェ
- 広告板
- 目玉け
- 突き出し看板
- 河川区
- 舟着き場

河川占用許可準則
(平成11年8月改正)

全国の河川

占用施設

公園、運動場、橋梁、送電線等の公共性又は公益性のある施設

占用主体

地方公共団体、公益事業者等の公的主体

特例措置
(平成16年3月通知)

全国の河川

社会実験として以下の8河川
 沙流川(平取町)、利根川(香取市)
 堀川(名古屋市)、堂島川等(大阪市)
 道頓堀川(大阪市)、箕面川(箕面市)
 京橋川等(広島市)、那珂川等(福岡市)

占用施設

左記施設に加え、

①広場、イベント施設等
 (これらと一体をなす飲食店、オープンカフェ、広告板、広告柱、照明・音響施設、バーベキュー場等)

②日よけ、船上食事施設、突出看板

占用主体

①の施設は、公的主体
 ②の施設は、公的主体又は民間事業者

河川占用許可準則
(平成23年3月改正)

全国の河川

占用施設

左記施設と同じ

①同左

②同左

占用主体

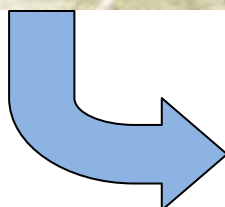
①②の施設の区別なく、公的主体又は民間事業者

総合設計制度の活用（広島市：京橋川）

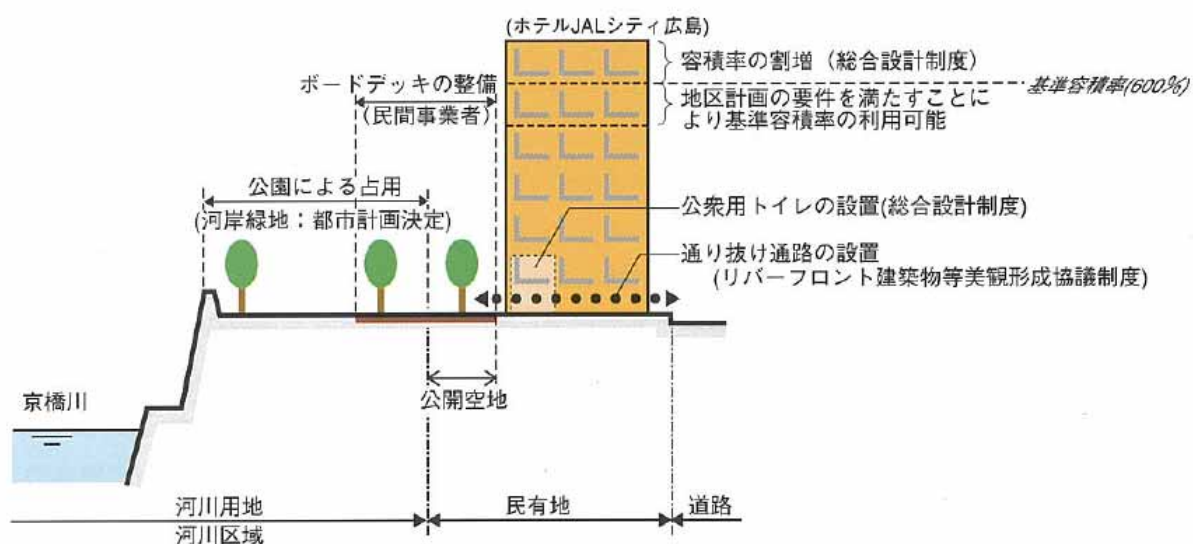
河岸緑地に面して公開空地を設置したことなどにより、容積率が割増された。



整備前



整備後



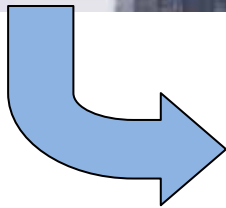
6. 都市のリノベーション

また、さらなるハード・ソフト施策の実施により、最近では、民間の開発などにより都市のリノベーションが進められ、各地でシンボルとなるような水辺空間が形成されつつあります。

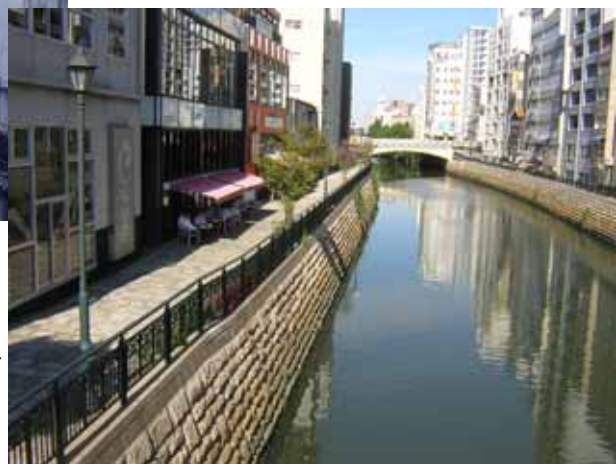
堀川 (河川改修と一体となった店舗のヘリノベーション)



整備前



整備後



隅田川 (シエロイリオ: 倉庫から飲食店舗ヘリノベーション)



川側への視線を重視した店舗
へ改装 (川側の窓も大きく)



日本橋川 (ニホンバシ イチノイチノイチ)



7. 「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会」

水辺、都市のリノベーションに高い関心を持つ、学識者、アーティスト、クリエイター、金融、不動産等々の各界の有識者からなる『水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会』を立ち上げ、未来創造へのヒントをまとめることにしました。

「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会」

コメンテーターリスト

(敬称略・50音順)

	氏名	所属
座長	じんない ひでのぶ 陣内 秀信	法政大学デザイン工学部建築学科教授
コメンテーター	い で げんいち 井出 玄一	一般社団法人ボート・ピープル・アソシエーション代表理事
〃	いとう かおり 伊藤 香織	東京理科大学理工学部建築学科准教授
〃	かない つかさ 金井 司	三井住友信託銀行株式会社理事・CSR 担当部長
〃	きしい たかゆき 岸井 隆幸	日本大学理工学部土木工学科教授
〃	くつな ひろき 忽那 裕樹	株式会社 E-design 代表取締役
〃	く め のぶゆき 久米 信行	久米繊維工業株式会社取締役会長
〃	し む た のぶこ 紫牟田伸子	紫牟田伸子事務所代表
〃	たなか よしひろ 田中 義宏	大阪府都市整備部技監(代理：藁田博行)
〃	つじた まさひろ 辻田 昌弘	三井不動産株式会社 S & E 総合研究所長
〃	とおよま まさみち 遠山 正道	株式会社スマイルズ代表取締役社長
〃	なかじま たかし 中島 高志	東京都建設局河川部長

○会議開催日等

- 第1回懇談会 平成25年12月27日 船上（隅田川、荒川等）
第2回懇談会 平成26年1月16日 リバーフロント研究所 会議室（日本橋川沿い）
第3回懇談会 平成26年2月7日 MIRRORビル7Fブリバード（隅田川沿い）
第4回懇談会 平成26年2月27日 マーチエキュート神田万世橋（神田川沿い）



第1回懇談会



第2回懇談会



第3回懇談会



第4回懇談会

8. 最近のトピックス

「全国の水辺自慢写真集」の募集・公表（平成25年9月）

～河川の美しさを再認識し、魅力ある水辺づくりへの意識の醸成～

○川や水辺の様々な魅力や価値を再認識するとともに、他の地域の水辺の風景に接することにより、今後の水辺づくりを考えるきっかけとなることを期待し、地域のシンボルとなっている「美しい水辺とまち」をテーマに風景写真を募集。



国土交通省 水管理・国土保全局の廊下を全面的にギャラリーとして活用し全写真を展示

東京リバーサイドライフドリンクス

これらの行政の動きに呼応して、民間の主導により、水辺に関心の高い方たちが、水辺の将来について語り合いながら交流、連携を深める「東京リバーサイドライフドリンクス」が開催。



第1回（平成25年9月26日）



第2回（平成25年12月4日）

➡ 水辺におけるビジネスチャンスの発掘や、水辺文化の発信源となっていくことを期待。

未来に向けた結び

本メッセージは、住民、企業、行政などのいずれか特定の主体に対してのものではありません。すべての日本国民に送られています。コメンテーターからの寄稿文は、コメンテーター個人のバックラウンドから様々な主体に対して送られています。多様な主体それぞれに求められていることを、多様な主体みんなが理解して共感できたら、考えて行動することが大切です。

水辺とまちを自由度の高い魅力ある空間に戻していくためには、水辺とまちづくりに関わること、とにかく楽しく使い倒すこと、既存施設をクリエイティブに再生すること、利用者自らが水辺の楽しみ方のルールをつくること、利用者と行政とのキャップを埋めること、行政も意識改革をすること、持続可能性を意識すること、などの視点が重要であるというたくさんのヒントが出てきました。

これらを実行するためには、住民、企業、行政の三位一体で取り組み、それぞれの主体のノウハウを共有したり、それぞれの間にある障壁をクリアすることが必要です。

今まさに、水辺とまちの未来創造はスタート地点に立ったばかりです。これからも、もっと議論を継続していくことが大切ですし、全国各地で、それぞれの地域の取組が芽生えるよう、「気づき」の視点を広めていくことと実行支援していくことについて、本懇談会はしっかり支援していくことを誓います。

この取組を普及させるためのプロモーションをこれからスタートさせることが必要です。水辺とまちの未来創造は今まさに始まろうとしています。水辺を「つくる」だけでなく「育てる」時代です。水辺とまちを「育て」あげる主役は皆さんひとりひとりです。皆さんの手で水辺とまちの未来を創造しませんか。